



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で継続13年目突入★

<http://www.hirahoku.com/>

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

毎日常 一生使える 小冊子



ダイヤモンド社 1400円+税

おかげさまで当「ひらほく新聞」も今号より継続発行13年目に突入しました。有難く全国でも多くの方にメール配信にてご愛読、ご活用いただいております。皆様の温かい笑顔を想像し、今後も有難く継続してまいります。よろしくお願いいたします。継続といえば、驚きの方を知りました。2020年11月に「世界最高齢の総務部長」としてギネス世界記録に認定の玉置泰子さんは、現在何と勤続66年。その幸せに働き続ける秘訣をまとめた書籍、『92歳総務課長の教え』をご紹介します。

継続したやりがい いつまでも好奇心

22歳で入社当初はすぐ辞めたいとも思った甘ちゃんの私。が今日まで働いてこられたのは、勤務先の会社が成長を続けて存続しているからこそ。創業間もない頃、何度かの経営的な試練もあり、その創業者の「三方良し」の姿勢、在り方に間近で触れてきた私は、「感謝」と「報恩」が人生の指針となりました。そして、創業者の信念を受け継ぐ社員は「その仕事、誰かの役に立っているか?」という信念で常に向き合い、社員同士でつながっています。社員との会話で「私も誰かの役に立っている。」「こちらこそありがとう」と感謝の念が湧き上がり、仕事のやりがいや、働く喜びにつながっているのです。

働くうえでのもう一つの指針は「いつまでも好奇心を失わない」こと。「明日はこんなことを試してみよう」という気持ちになれば、明日がやってくるのが待ち遠しくなります。

40年ほど前の1981年、会社にパソコンが導入されたとき、私は51歳。担当していた経理事務では当時、手書きで台帳記入していたため、「これならミスが減らせる、こんないいものはない!」と興味を湧かせて、導入当時は毎日ワクワクしながら働いていたことを覚えています。

仕事ほど、人を成長させてくれるものはありません。仕事を通じた「自己変革」は、私にとって楽しくてたまらないことでもあります。

今日頑張れたら 明日も頑張れる 掃除を重視 自分が主人公

2020年、年末のギネス認定式は、直前まで知らされず、サプライズでした。いきなり感想を聞かれ、驚きながら口をついて出たのは、「積小為大」という二宮尊徳の言葉でした。これは「小さな努力の積み重ねが、大きな成果につながる」という意味です。私には「今日頑張れたら、明日も頑張れる」という長年のモットーがあります。私は50年ほど、毎朝30分、ヨガと(結跏趺坐という左右の足を組む坐禅の座り方で)瞑想を続けています。そしてそのあと、「般若心経」を15分ほど唱えています。心と体は一つであり、その極意は、心を綺麗に整えて「いまを生きることに集中する」ということ。

明日がどうなるかを考える前に、今日を精一杯頑張ればいいのです。「今日頑張れたら、明日も頑張れる」と思えるのも一つの理由は、人はいくつになっても少しづつ成長できるからです。会社員としての成長も、同じようなことです。私は92歳になるいまでも、昨日よりも今日、今日よりも明日のほうが、ちよっぴり成長しているという実感があります。

当たり前のことを中途半端にやっても意味がありません。当たり前のことを徹底的にやるからこそ、意味があるのです。凡事徹底で重視すべきことは一般的に「整理・整頓・清掃・清潔・躰」で「5S」と呼ばれています。なかでも私が重視しているのが清掃(掃除)なのです。デスクやパソコン内部も整理整頓が行き届けば、頭の中身も整理整頓され、回転は速くなります。会議室やトイレといった共有スペースも、専門スタッフではなく、66年前に入社した頃から変わらず社員が率先して行っています。

「営業活動は掃除から始まる」というのも私の長年の持論です。やはり第一印象は大事、「人は見た目が9割」といいます。第一印象に二度目はありません。そして、外勤の営業だけではなく、内勤も含めてすべての社員が営業担当であり、その基本的な仕事のひとつが掃除なのです。

掃除をすると相手の立場になって考えられるようになります。お客様の気持ちを考えながら仕事を習慣づける、凡事徹底の継続が自信を育ててくれます。

会社では一人ひとりが違う仕事をしていますが、それぞれが引き受けた仕事に關しては、一人ひとりが主人公です。上司にいわれたからやっているという人ごとの意識ではなく、頼まれた仕事は自分自身の大切な仕事だと「責任を意識する」ということです。

その他、長く幸せに働く63の秘訣より

■ エンディングは つねに笑顔

■ 「ほうれんそう」に “お返し” をする

■ 「すみません」を 「ありがとう」にかえる

■ 説教・昔話・自慢話をしない

■ 悪口をいうと 「運」が逃げていく

※詳細はぜひ書籍にて

★2021年MBSテレビで特集が放映 商社で働く『世界最高齢の総務部長』に学ぶ「働く意義」→



★書籍の帯に絶賛メッセージを書かれた本田健さんと玉置さんの特別対談が限定公開中。 ↓ ↓ 「ありがとう」「ついでに」「感謝してま」のポジティブ言葉が大好き。「誰かを応援すること、誰かの役に立つこと」が幸せ。100歳まで現役で働いてエッセイを書くことが夢だという、読書家でもある玉置さん。元気いっぱいのパワーを動画でもぜひお受け取りください。



夢を叶えるゾウ

ガネーシャと

夢を食べるバク

水野敬也 著

笑って泣けて役に立つ、自己啓発エンタメ小説の金字塔！夢を叶える人生のバイブル最新刊。5巻目にしてゼロ、「夢を持っていない」というこれまでのシリーズの前提を覆す青年が主人公。パワハラ上司、Zoomなど現代風な設定も登場。

「夢は本当に必要なのか？」夢を持っていない人間をガネーシャと相棒のバクはどう導くのか。以下、感動の教養を抜萃、ご紹介します。

「いつもと違う道を行く、普段とは違うものを買う、見知らぬ店に入る……どんなささいなことでもいい。日々の生活に『初めて』を取り入れなさい。そして、人間は、未知なるものこそ喜びを見出す存在であることを——未知の要素がないのなら最高の楽しさは決して得られないことを——実感するのだ」

「これまで、君の人生には、君から自信を奪い、自分への不信感を募らせる出来事が起きたろう。苦しみ、嘆き、みじめな気持ちになる出来事が起きたろう。それらのすべてに向かって言いなさい。『君たちは、伏線だ』と。これらは自分が夢を見つけるといって——自分が幸せになるといって——人生ドラマを最高に盛り上げるための必要不可欠な伏線なのだ！」



タカラモノ

ビジネス書ベストセラー作家・ビジネスコンサルタント、和田裕美さんによる初小説。書店員さんからも大反響！まずは帯より：

■ママはときに男と出奔する、どうしようもない母親だ。けれどその自由な生き方に魅了され、誰もが彼女を愛してしまう。

人を好きになるといってとは？わたしは人生でなによりも大切なことを教わっていく。

「ハズレ」の人生なんてないと思わせてくれる、最高のエンタメ小説！

■以下、書籍より

小学生の時、母は仕事でほとんど家にいなかった。

「放っておいてばかりでみんなに「かわいそうに」といわれて、こんな家じゃ誰でもグレて不良になるわ！ママのせいだ！ママのあほう……」と母との会話。

「ごめんね、もっと家にいるようにするわ」と言っ

よ、お願いママ……と願う。するとママは……

「どうぞ、グレてください」わたしをまっすぐ見つめていった。

「あんたが不良になっても、あんたがそうしたいんやったらママはそれでもええねん。ママはあんたが不良になっても痛くもかゆくもないねん。そやけどな、誰が損すんの？あんたがいややったら、そうならへんかったらええんちゃうの？」

「だいたい、誰かのせいであらうな」と思ったら、これからあんなどうやって生きてくの？全部自分で選んだことやねんから。もっと大人になつたら、それを全部自分で責任とっていくんやで。

あんな、ママは幸せやで。誰になにいわれてもな。だ

って自分で選んで生きてい

るんやもん。だから明日死んでも悔しいわ。あんた

な、幸せになりたいんやたら、誰かのせいにしたらあかん。誰かに頼んでもあかんねん。そついうもんや

20年近く前、本屋さんで偶然手にした、和田裕美著

「こうして私は世界No.2セールスウーマンになった」。即、陽転思考にドハマリ、有難く「陽転思考10ヶ条」を会社で唱和するほどに。

当時、自伝も語った感動あふれる講演を何度も聴いた。和田さんの幼少期からの家庭環境、上京後の苦勞、そしてお母様の突然の……

ある意味自伝書でもある「タカラモノ」のラスト、号泣でした。

日常生活のなかにあるた

くさんの教え、失敗にも必ず学びがある。ご両親への感謝がたつぷり伝わってくる感動ストーリー。そして、あなたもきつと、誰かのタカラモノだと気づく……

ぜひあらゆる年代の方に読んでほしい一冊です。

病院の待合室にて

私は、岡山で小さな病院の受付事務をしています。

内科、小児科が専門ですが、十年前のある日の夕暮れ時、病院の待合室で起った出来事です。

狭い待合室に、三人の患者さんがいました。その中に、学校の先生が二人おられたのです。一人は五十半

ばの女の先生。もう一人は三十過ぎの男の先生です。そこへ顔色の悪い女の子を

連れなお父さんが、入って

来ました。どうやら、こちらは初めての患者さんのようです。私は受付のガラス窓から、保険証を受け取り、カルテを作っていました。

ところが、「ウエー」という声が出たのです。急いで顔を上げると、先ほどの女の子が食べていたものを吐き出し、それをちょうど真向に座っていた男の先生が、自分の両手で受け止めていたのです。他人の嘔吐物を、父親ではなくて、

見ず知らずの他人が、素手で受け止めていたのです。私は驚いて声も出ませんでした。そして、世の中にはこのような人もいるのかという衝撃で体中に熱いものが走りまわりました。それは、勇気などというものではなくて、とつさの場合に出た自然の行為で、平素から子供に対して深い愛情を注いでいるに違いないこの先生の豊かな人間性に他ならないと思っただけです。(中略)

看護士さんが、急いで雑巾で後始末をされましたが、もう一人の女の先生は、自分の足元あたりを指差して、「このあたりまで飛び散っていますよ」と言われただけでした。

そして何カ月かたった、ある日のことです。その日は待合室が大変混んでいました。風邪がとても流行っていたのです。玄関には、

脱いだ履物が散乱していま

した。そこへ小学校高学年くらいの男の子が入って来ました。男の子は靴を脱ごうとして立ち止まり、すぐにしゃがみこんで、散らかっている履物をきちんと揃え始めたのです。今どき、珍しい子がいるなあと感

て感心しました。男の子は揃え終わると、自分の靴を脱いで、私の前まで来て、保険証を出しました。差し出された保険証には、何と数カ月前、他人の嘔吐物を素手で受け止められた先生の名前が書いてあったのです。

やはり、この親にして、この子ありなんです。私はなんとも言えない感動で胸が一杯になりました。

潮文社『心に残るとっておきの話』第五集より

編集後記

玉置泰子さんは15歳だった終戦の年、1945年に父を亡くした(56歳の若さで戦死ではなく元々身体が弱い体質での過労が原因)。当時、母は39歳、下に12歳の妹、8歳と5歳の弟。母も身体が丈夫なほうではなく、「父に代わって、私が頑張らない」という義務感が芽生え、玉置さんが今日まで働くうえでの原動力となっているという。

何度かご紹介している、おせっかい協会会長の高橋恵さんの辛い幼少期の生い立ちを思い出した。和田裕美さんが「タカラモノ」で表現した母の愛溢れる言葉たちも。幼少期の感情を伴う体験が自身の重要な心の幹となり、誰かの笑顔のためにという、後の人生に大きく影響している。

同様に、大きな心の傷となつて壁をつくつてしまふ原体験もある。難しいその壁の壊し方については、またの機会に取り上げたい。

ハイハイや歩くことをしなくないと自ら嫌がる赤ちゃんはいない。生まれたての赤ちゃんは100%潜在意識の固まりだという。そこから両親や周りの大人たちからのあらゆる言葉がけ、行動で自身の常識(潜在意識)を創り上げていく。

9年前に書籍紹介した、八田哲夫さんの「手を出さないことが最大のサポート9歳までの「しつけ」の基本、子どもが自分で伸びていく6つの習慣」をここにあらためてご紹介する。

- ①自分からあいさつをする
- ②靴をそろえる
- ③よい姿勢で座る
- ④「はい」と返事をする
- ⑤約束を守る
- ⑥早寝早起き朝ごはん

※さらに次の4つもぜひ！
素直・掃除・笑顔・感謝